

審査の結果の要旨（別紙2）

論文題目： 初期仏教教団の研究——サンガの分裂と部派の成立
氏名： 李 慈郎

従来インド仏教教団の歴史は、『異部宗輪論』等の歴史書の記述に従って「ブッダ在世中は一つであった教団が、ブッダ入滅百年後に起こった根本分裂、二百年後に起こった枝末分裂という二度の大分裂を経て、上座、大衆をはじめとする二十の部派に分裂した」という極めて大雑把な枠組に収められ、教団分裂の実態の不明明さ、関連文献や碑文資料との間に生じる不整合など多くの問題が放置されたままであった。近年、アショーカ王碑文の解釈をめぐる議論を発端として教団分裂解釈の問題が根本的に見直されはじめ、初期教団研究は新たな段階を迎えた。本論文はこうした最新の研究状況に触発され、膨大な過去の研究史を綿密に分析した上で、律蔵資料、歴史書、論書、碑文などの一次資料を丹念に読み解き、初期の教団がいかなる経緯を経て分裂しながら、やがて後世の部派成立に至るかを詳らかにした論文である。

論文は序章、結論を含め全七章よりなる。序章ならびに第一章において膨大で複雑な見解が乱れる研究史を網羅的に回収、分析、整理し、この成果に基づいて第二章から第五章にかけて、サンガの分裂と部派の発生の関係、根本分裂の諸伝承に見られる教団分裂の背景、教団の発展と僧院化の関係、アショーカ王と分裂碑文の問題など、教団史の考察に必要な主題全体をとりあげて詳細に論じた。

結論として本論文は、教団の分裂は、(1)〈結界 sima〉という律蔵の定義に基づく現前サンガの拡大による自然な分裂、(2)争議に基づく分裂とグループ化、(3)律蔵制度部の成立による最終的な部派意識の成立、という三段階に分けて考察すべきであり、けっして唯一の教団がキリスト教会のシスマのごとく分裂したのではないことを明かした。ことに(2)の段階において、〈不同住〉〈不共受〉という律蔵の概念の考察をなした上で、教団分裂企ての際に適用される罰則が現実に機能した可能性は低く、実際にはむしろ分裂後に両者を調停する規則が働き、そのために分裂はかえって起こりやすかった点を指摘するのは、律蔵が厳しく破僧を戒めながらも、なぜ結果としては諸部派が生まれたのかを説明するための有力な新説である。

論文全体の記述に疎密が見られるなど問題点も残してはいるものの、本論文は、初期教団史解明の点で学界に寄与するところ大きく、博士（文学）に価するものと認める。